

末黒野 平成二十四年十一月五日発行 第六十七巻第十一号（通巻七九五号）

末黒野

すぐろの

11月号

（通巻795号）

入院記（四）

小川玉泉

森出づる日の眩しさや朝涼し
早起きは燕に負けず夏旺ん
車椅子自由に使へ廊涼し
行く夏を乗せて真紅の千切れ雲

看護師の足音覚え秋立ちぬ
足萎えの癒ゆるを願ひ星祭る
病廊の灯に透く笹や星今宵
看護師の唄ふ七夕外は雨
秋つばめ歩行器いまだ手放せず
茜空惜しむかに舞ひ秋つばめ
病室の曇りなき玻璃雲は秋
焼売の骨に歯の欠け秋の暮

雁来紅

松本三千夫

立秋の波のころがす小石かな
わたつみに雲湧き立てり広島忌
竹林の葉擦れ重たき残暑かな
藪からし鉄路の土手のある限り
葛咲くや潮騒近き峠道
雁来紅いよ夕日を燃え立たす
色づける棚田の風や蕎麦処
雲高し処暑の岬の停留所
論弾む尺越す桶の鮓つまみ
夏果ての正宗鍛冶屋火花散り
森出づる瀬音けだるき秋暑かな
秋澄むや眼鏡支ふる耳ふたつ

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

夜の秋

大橋伊佐子

暮れ際の遠嶺耀く朴の花
麦秋や野の果てに浮く藍筑波
人棲まぬ生家の背戸や茗荷の子
紙魚の棲むわが青春の愛読書
大寺の楠の枝ぶり蟬涼し
蟬時雨ふと止む刻を松の風
夜干しせる梅干匂ふ夜の秋
在すごと語りかけつつ門火焚く
帰省子を家中灯し迎へけり
雨音の止みし静寂や夜の秋

蜩

清海信子

心地よき川風うけて船料理
村沈め大向日葵の林立す
涼しさや丈長く着て峡泊り
余生とてなほ希望あり雲の峰
蟬死して夕日の中に裏返へる
航跡を忽ちほぐし土用波
船溜り藻屑漂ふ晩夏かな
島々は島のかたち暮れて秋
湖畔径ゆく秋風をまへ後ろ
雑木山蜩山となりにけり



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

単 帯 岡田史女

すつぽんに注意の札や蓮浮葉
咲き分けて源平池の蓮の花
ほの甘き抹茶の味や蟬時雨
足利氏末裔の墓したたれり
真清水や切り口青き竹の杓
不揃ひの眉ととのへり単帯
ヨットの帆水平線をはみ出せる

溽 暑 岡野里子

戻り梅雨僧の白緒の高齒下駄
襖絵の達磨眼を剥く溽暑かな
沼けぶり蒲の穂に凝る小糠雨
初蟬や小径の苔のやはらかき
竹の庭愛づる茶店や蚊遣香
涼しさの噴き出したりポンプ井戸
麩饅頭包む笹の葉香の涼し



草 引 き

小倉 正穂

上 品 仏

菅野 日出子

草引きし跡のそよ風深く吸ふ
追想を残し線香花火消ゆ
ねぎらひの訛風より涼しくて
ふる里の星空花火よりも美し
腕時計外づせしのみに涼しとも
変らざるもの空めみや終戦日
日々無為の老いに八月長きかな

浜 木 綿

加藤 静江

大 花 火

菅野 蒔子

糸滝や不動の岩の苔つたひ
くろがねの井の竹の蓋日雷
竹寺の深き矢倉や蟬の声
浜木綿の終の一花や白極め
孤影濃きスカイツリーや夏果つる
行合の雲の白さや萩の花
ひと日過ぎ一日減りゆく今朝の秋

道路工事のオーライの笛炎天下
越前の夏暁や大きな星一つ
夏暁の月や一朵の雲侍る
青葉風防音壁にヨットの絵
しなやかに華麗に開き大花火
菊を見せしだれて散りぬ大花火
ハナ奥様鬼籍に入られ虹消ゆる

青炎集

横浜 中山良子

阿夫利嶺の浮く雲淡し晩夏光
酒蔵に葉の影落とし夏の月
街中の一寺鎮まり百日紅
鳳凰の目のルビー映え神輿過ぐ
飾り紐の古代紫大神輿
庭草の勢あはじふ間蟻の塔

横浜 新堀満寿美

涼風や苔厚く着て無縫塔
節電をうたひ売り出す扇風機
青鷺の時はいづこ風荒し
いく度も風に戻されあめんばう
蜻蛉生る夕日の蔭に身じろがず
風に舞ひ翹ひらめかす川蜻蛉

小川玉泉選

横浜 小山ほ子

方丈に扇子のゆるる法話かな
梅雨晴れや鳥語にはかに古刹占む
老鶯の鳴き過ぎ静寂深めけり
合掌の法衣に覗き汗手貫
水際を弾んで歩く裸の子
門灯に夜ごと家守のはり絵めき

横浜 八城洋子

干梅の日暮れて熱く香りかな
確かめつ十キロほどの梅を干す
雲の峰北の大地を遠巻きに
夏風邪に声奪はるるふた日かな
擦れ違ふ男の子香水使ひをり
早旦の裏山忙し蟬時雨



千葉

亀卦川菊枝

雉鳩の軒近く啼く迎へ盆

胸に棲む倂増ゆる魂祭

鬼来迎鬼に抱かるる虫の秋

赤ん坊に湯浴さすごと桃洗ふ

小膝まで磯波ざぶと秋の浜

中空の真澄を流る赤とんぼ

横浜

中野久雄

打水に風の生まるる日暮かな

黙々と草食む駒や雲の峰

一雨にひと息つけり夏の夕

初蟬や未だ覚めやらぬ宮の杜

寄り添へる浦曲の灯夜の秋

昼の鐘紅はんなりと酔芙蓉

横浜

上月智子

ざく切りの冷しトマトや独り膳

夕立来て砂場に残るシャベルかな

甲子園を目指す走りや月涼し

箱庭や考の集めし石を置く

幼子のやまぬ泣き声蟬時雨

旅終へし長子の熟寝遠花火

横浜

有賀鈴乃

咲くほどに散り重なりて凌霄花

日盛りや風鐸の音かすかなる

開かれし山門の鎮灼けてをり

仙への茶の香ばしや秋立てり

迎へ火を風に抗ひ焚きにけり

送り火や身の内風のうち過ぎて

横浜

前川美智子

帆走の白帆眩しき青岬

夕河鹿舟清流を遡る

子燕の軒端に眠りバスを待つ

藍浴衣の少女の足や紅の爪

闇を行く沖の灯涼し崎泊

慕ひ来る牧の羊や秋隣

横浜

小倉純

蘇る千古の蓮や紅淡き

オブジェめく枯木脈はし灸花

鳶職の場所を選ばず三尺寝

剪り揃へ子への土産の濃あぢさゐ

横文字の短冊湿り星祭

夜半を待つ月下美人のよき香かな

耕 土 集

松本三千夫選

山鉾の塵壘に傾ぐ四辻かな

口開けて鴉居並ぶ炎天下

団子食む峠の茶屋や蟬しぐれ

連山の隅まで晴れて大夕焼

身を反らしサックス吹く子光る汗

横浜 今野 明子

リユツク負ふ友の元氣や山法師

町中の音の途絶ゆる炎暑かな

Vサインを大きく画く夏の雲

大切な夫の柿の樹枝揺ふ

猫じやうし意符のやつに風の中

中村 美代

指切りの別れが最後夕焼空

鈴捧げ巫女の神樂や樟茂る

メコン川親子の旅の船遊び

途切れたる二人の会訃品蟬時雨

玉の汗流す紳士や地鎮祭

宮元 陽子

夕映の色重ね合ふ浅霄花

高みへと意志の伸びゆく立葵

草の花垣夏のやうな夫つれて

秋さびしもつ動かざる氷川丸

人恋ふや前に後ろに秋の蝶

庭仕事今日ここまでと夕端居

羅を重ね合わせて風誘ふ

瓜きざむ音はソの音三連符

傘の内に蝶の舞ひ込む暑さかな

夕陽浴ぶる金えのころや無人駅

幼子のポケットの蟬ふいに鳴く

一人つつ渡る石橋水葵

庖丁に握り癖あり西瓜切る

夕涼や湯浴みせし子の束ね髪

拔手きる水の重きや夜のプール

新宿 浅岡 麻實

横浜 斉藤マキ子

清水 元子

